（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　松井　隆明

本論文は、セラーズの言語をめぐる哲学的考察、特に、言語の意味に関する彼の理論を解明することを目的とするものである。セラーズは、言語的表現の意味を、その表現の「使用」(use)という観点から体系的に理解する道を提示したことで知られるが、最終的にその意味は「理由の空間」(space of reasons)と彼が呼ぶものによって規定されると主張する。すなわち、言語的表現の意味は、それが、理由の空間において理由を与え、問う推論的実践の中で担う役割によって規定されるという「推論主義」(inferentialism)の立場が明示されることとなる。申請者は、このように的確な整理をした上で、セラーズの意味論を、これまでさまざまな研究者から指摘されつつも、セラーズ自身によっては体系的な説明が施されていなかった「概念変化」(conceptual change)、「概念改訂」(conceptual revision)という局面に焦点を当て再吟味し、そこに内包されている問題点と可能性を明らかにしている。ここに、本論文の最も独創的な試みと既存の研究を刷新する意義が現れていると評価できる。その作業は、『科学と形而上学』(1968)、そして「概念変化」(1973)を初めとするセラーズの著作と論文を申請者が丹念に読み解くことによって遂行されるが、そこで得られたアイディアを申請者は、哲学史の文脈において再検討すると同時に、現代の議論と照らし合わせることを通じて、セラーズの哲学の可能性を引き出すことに成功している。この点は、本論文の特筆すべき成果であると考える。

以上のような関心の下、申請者が本論文で探究の重点に置いているのは以下の三つの目標である。それは（1）言語の哲学における推論主義についての考察、(2)「概念工学」もしくは「概念倫理」と称されるメタ哲学領域における概念をめぐる規範的かつ基礎的な考察、(3）戦後の分析哲学史の考察であり、これらは各章において横断的に綿密な分析が施されている。

第一章では、セラーズの意味論が静的な体系であるがゆえに「概念の改定」と「概念の置換」の峻別ができていないとする一般的な理解を覆し、セラーズの推論主義においては、概念それ自身と、その概念の主題(subject)が明確に区別されていることを考えるならば、その両者を区別することが可能であるのみならず、セラーズの体系が動的な構造を有していることを示すということを強い説得力で提示することに成功している。第二章では、セラーズのプラグマティックな概念の正当化を詳細に分析することを通じて、概念をめぐる規範的な研究にセラーズの考察が寄与する可能性を明らかにする。それは、正当化されるのは概念そのものではなく、概念の「採用」(adoption)であるがゆえに、その正当化は進行中の探究内部においてのみ可能となることを明らかにすることによって、セラーズと他の哲学者たちとの際だった差異を示したことの意義は大きい。第三章では、クワインの批判以降、全面的な懐疑にさらされることになった「分析／総合」の区別をセラーズが言語使用の場面において堅持していたことを明らかにし、第二次大戦後の分析哲学の歴史においてセラーズが特異かつ重要な位置を占めたことの内実を明らかにすることに成功している。第四章においては、見逃されがちなパトナムからのセラーズ批判とそれへの応答を、テキストに即しながら再構成することを通じて、彼の「理想的な後継的枠組みに基づく外在主義」という意味論の構想を明らかにし、その意義を説得力のある形で提示し、現代の標準的な推論主義（たとえばセラーズの後継者であるブランダム）に寄せられる批判に耐えうるポテンシャルをセラーズが持っていることが示される。

このように申請者の綿密な分析によって難解と評されることの多いセラーズの哲学の姿が明らかとなり、今後の研究の展開を左右しうるような視点を提供する本論文の意義が高く評価される。いくつか、論文の体裁面で審査委員会から意見が出たが、それに対する申請者本人の説明は納得のいくものであった。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。